

## 令和4年度第1回農林水産技術センター評議委員会概要

◇日時：令和4年8月23日（火） 13:30～16:30

◇場所：京都府公館 第5会議室

◇出席者：別添出席者名簿のとおり

### 1 開会（水口農林水産部長あいさつ）

京都府では、「京都府総合計画」の改訂作業の中で、食を取り巻く課題を解決する取組を進める「京都フードテック構想（仮称）」の策定に取り組んでいる。

この構想の中で、農林水産技術センターは京都府の一次産業を支える研究拠点として位置づけられており、産学公連携を基礎として、生産技術の開発、加工食品技術や輸出を見据えた流通技術の開発などを通じ、京都フードテック構想を支える機関として、これまで以上に期待が高まっているところであり、今後再編整備に取り組んでいく予定である。

このような情勢を踏まえ、本日は忌憚のない御意見・御指摘も含めて御協議・御助言をいただきたい。

### 2 評議委員紹介

### 3 協議事項

#### (1) 継続課題（令和4年度評価対象）の評価（別紙議事録1参照）

- ・7課題について、各部門センターから取り組み状況を説明

#### (2) 令和5年度研究方針（案）について（別紙議事録2参照）

- ・企画室より案作成に向けた考え方を説明

### 4 報告事項

#### (1) 令和3年度終了課題に対する評議委員からのコメントと回答

#### (2) 令和3年度試験研究で開発された主な成果

#### (3) 令和4年度FS研究課題

#### (4) 令和4年度タスクチーム活動

#### (5) 開かれた試験研究機関の取組（施設公開の実施状況）

#### (6) 競争的資金への応募状況

#### (7) 産学公京もの新ブランド価値創出事業

#### (8) その他

### 5 閉会あいさつ（古谷センター長）

協議事項（1）継続課題の評価（意見・質問）

(P3-1(3)機械化による丹波黒ダイズ系エダマメの省力収穫体系の構築：評点4.0/5点 以下同じ)

- 草姿をコンパクトにするのは収量低下や豆が小さくなるといったリスクを伴う。そのあたりのバランスをどう考えているのか。
- 技術を確立するだけでなく、収益やコストを計算してしっかり説明できるようにしておく必要がある。
- トレイで育苗したものに湾曲が見られなかったというのは、ある程度育てた後の結果か。
- 京夏ずきんで機械収穫の成績が良かったのは草姿の問題か。
- 機械に合わせるために何かを変更して枝豆の品質、ブランド力が低下することになるのであれば、再検討していただきたい。機械に合わせるより、機械を合わせるべき。品質を維持しつつ、機械でフォローするのが基本ではないか。
- 草姿を小さくしたら豆も小さくなったということではブランド力が落ちることになるが、その点についてはどうか。

(P3-1(1)エビイモ省力栽培体系の構築と実証：評点4.5)

- 掘取り機は通常のアタッチメントとして市販されているものか。
- アシストスーツの利用はどういった作業を想定しているか。
- アシストスーツ利用の評価は、時間短縮だけでなく、労働の軽減、疲労度なども必要。
- 力の有る無しで分担していた作業が、誰でもどの作業でもできるということになれば効率も上がり、また、地域の色々な人が作業に従事することにつながると思う。
- 中耕培土の回数を減らした結果、雑草が増えて除草剤の使用が増えるということになれば、持続可能といった昨今の情勢に逆行することになる。中耕培土の時期をずらすことで対応できるかもしれないので、雑草の専門家にも相談してみてもどうか。
- 最近のえびいもは、小イモの割合が多く、「えび」の形になっているものが少ない印象だ。ブランド京野菜としてふさわしい「えびいも」を作る研究をしていただきたい。

(P3-1(2)万願寺トウガラシ省力化のための選果機の開発：評点4.1)

- ①開始早々に参加企業が撤退し、また低コスト小型選果機の開発という課題で始めたのに、現場では大型選果機を整備することになったというのは、設計や現場のニーズの把握が不十分だったのでは。②画像でセンシングして判断して選別する。この判断のところが一番難しいアルゴリズムであり、説明が必要。戻ぐされ果の判別についても、画像処理した後はどう認識しているかが重要な部分。戻ぐされ果に特化しているのはなぜかという説明も必要。
- 大型でいいとなればそれをきちんと進めていくことが重要。戻ぐされ果の判別がこの選果機にどのようにつながっていくのかもきちんと考えて進めてほしい。
- 生産者はこの選別機ができることを望んでいる。大型か小型かにはこだわらないので、性能のよいものを作ってほしい。

(P2(1) トウガラシ収穫ロボットの開発：評点 3.6)

- 栽培管理をするなら生育データだけではなく、環境データが必要。ハウス内に安いセンサーをたくさん設置するなどして、ハウス内の複雑な環境データを取得し、生育データを併せて活用する必要があるのではないか。データの使い方、アウトプットが甘いと感じる。

(P30-1(1) 新しい食べ方で消費拡大につながる伝統野菜の復活：育種課題は評価なし)

- 品種育成なので1つを選定すると思うが、消費者的には多色も多様性があるって面白い。葉も食べるなら、紫より緑色がおもしろいと思う。着色しているものは、機能性やストーリー性など付加すればブランド化して打ち出せると思う。

(P3-2with コロナ宇治茶プロジェクト 新生活様式での需要創造のための研究開発：評点 3.8)

- いかに簡単に飲めるかが大事。家庭で茶葉を保存している家庭も少なく、ティーバッグやカセット式など検討が必要だと思う。
- 保存による品質低下に水分が影響するのは、見た目が悪くなるということか。味が悪くなるのか
- コロナ禍で在宅時間が増え、料理して食べる機会が増えたが、緑茶の消費が増えない。京都や日本の食文化と密接に結びついている緑茶は世界にも通用するブランドなのにもったいない。嗜好品なので仕方ない面もあるが、飲みやすいお茶を目指すのではなく、研究所として「これが最もおいしいお茶」というものをデータで示し、子供たちに味を覚えさせる取り組みが必要ではないか。
- 宇治茶の売り上げが低下しているが、リーフ茶の消費を大きく拡大していくのは正直厳しいと思う。手軽なペットボトルでもよいので、京都府産のお茶をもっと飲んでもらえるような取組が必要ではないか。

(P1-1(1) 機械摘みてん茶における生葉データを活用した製茶工程の省力管理システムの開発  
：評点 4.4)

- この方法で繊維含有量を調査し投入量を決めれば、適正な製茶条件となるのか。それは実証されているのか。

協議事項（2）令和5年度研究方針（案）について

- 情勢の変化という点で、肥料・農薬の高騰について触れて欲しい。京都府は費用補填など対応してもらっているが、費用がかかることに変わりはない。肥料・農薬を減らす技術が必要であり、そういう研究をして欲しい。

ウクライナ戦争やコロナ禍など、思いもよらないことが起きる。肥料・農薬は輸入に頼っており、今後農業の生産性を維持し日本国内の食料を守るためには、肥料・農薬を減らす技術が必要。そういう視点を盛り込んで欲しい。

→現状の課題、肥料・農薬・飼料の高騰に対して、各部門センターに研究機関として今すぐできることを考えるよう指示しているところ。研究課題は手順を経て計画し3年間かけてやっていくものであるため、すぐに課題化することは難しいが、業務課題などの中で今すぐできることや、継続課題の中ですぐに生産者に返せるものを考えて、取り組んでいく。研究の活躍の場であると考えている。

- 方針の考え方は概ねこれで良いと思う。1（1）国内農林水産業と農山漁村を取り巻く状況については毎年変化があるので、毎年見直す方が良いと思う。肥料高騰など盛り込むとともに、みどり戦略やSDGsについては、京都府としてどう具現化していくかということを書いておく必要がある。そこに工夫が必要。

- 研究方針については、本日の意見を踏まえて次回案が示されるので、それを受けて議論することとする。

# 令和4年度第1回京都府農林水産技術センター評議委員会出席者名簿

令和4年8月23日(火)  
京都府公館第5会議室

## ◇評議委員

板井 章浩	京都府立大学大学院生命環境科学研究科 教授	御欠席
長島 啓子	京都府立大学大学院生命環境科学研究科 教授	御欠席
齋藤 敏之	京都産業大学生命科学部 教授	御欠席
三田村 啓理	京都大学フィールド科学教育研究センター 教授	御欠席
飯田 訓久	京都大学農学研究科 教授	御欠席
深見 治一	京都先端科学大学 名誉教授	(評議委員長)
北村 實彬	NPO法人 近畿アグリハイテク副理事長	(副委員長)
牧 克昌	京都府農業協同組合中央会代表理事専務	
川村 幸子	京都府生活協同組合連合会理事	
齋藤 三映子	有限会社 エスアールフードプロデュース代表取締役	